

茨城県水戸市における中心市街地活性化と

今後の展望

—茨城の未来—

22191062 横塚洋介

本研究は、茨城県水戸市を対象として、中心市街地の現状と課題を明らかにするとともに、今後の活性化の方向性について考察することを目的とする。水戸市は、江戸時代に水戸藩の城下町として発展し、政治・文化の中心として重要な役割を担ってきた。しかし、近年では人口減少や高齢化の進行、郊外型大型商業施設の進出、自動車依存型の都市構造などの影響により、中心市街地のにぎわいが低下している。

本研究では、まず中心市街地活性化に関する先行研究を整理し、コンパクトシティ論や都市再生理論などの理論的枠組みを確認した。これにより、人口減少社会においては、都市機能の集約や歩行者中心の空間形成、地域資源の活用が重要であることが示された。

次に、水戸市の現状について、人口動態、商業機能、交通、都市構造の観点から分析を行った。その結果、水戸市では若年層の流出と高齢化が進行しており、中心市街地における商業の衰退や空き店舗の増加が顕著であることが明らかとなった。また、鉄道やバスといった公共交通の利便性が十分に活かされておらず、自動車依存が中心市街地の衰退を加速させている実態も確認された。

さらに、他都市における中心市街地活性化の成功事例を分析し、水戸市への示唆を導き出した。これらの事例からは、行政主導だけでなく、民間事業者や市民が主体的に関与するまちづくりの重要性、地域固有の歴史や文化を活かした空間づくり、滞在型・回遊型の都市構造の形成が有効であることが示された。

以上を踏まえ、本研究では、水戸市中心市街地の今後の展望として、都市機能の集約によるコンパクトなまちづくり、公共交通と歩行空間の強化、ICTやAI技術を活用した情報発信と都市管理、さらに地域住民や学生を含む多様な主体が関わる持続可能なまちづくりの必要性を指摘した。中心市街地の活性化は、単なる商業振興にとどまらず、人々が集い、交流し、生活の質を高める都市空間を再構築することに本質があると結論づけられる。